

2018
おもろ
チャレンジ

世界で1番犬を飼う国で、犬の福祉づくりを考える

医学部 3年

石川 真帆

チェコ

2018年9月13日-

2018年10月1日



渡航概要と内容

<渡航目的>

犬とともにリハビリテーションをする動物介在療法の実現を目指し、そのために必要な犬の福祉環境の整備について、世界で最も愛犬家が多いチェコ共和国でそのヒントを得ること。

<渡航概要>

チェコの首都・プラハを中心に滞在し、滞在期間中は以下の点について調査をした。

- ①犬の繁殖・譲渡
- ②犬のしつけ・トレーニング
- ③愛犬国と殺処分0の両立
- ④日常に隠れた、犬と生活しやすい社会環境



プラハ市内の風景



①犬の繁殖・譲渡

動物の繁殖業者が子犬を生産してペットショップで売る日本とは異なり、チェコではそういったビジネスのための繁殖がほとんど存在しない。一家庭を単位として主に趣味でブリーダーをしている方から、譲渡までに必要となった費用などを支払って犬を飼うことが主流である。過剰な犬の生産、殺処分を防ぐのに役立つと思った情報を以下にまとめた。

今回の渡航で2人のブリーダーを訪問した。

i. ベルン犬ブリーダー Daniel Brodan さん

子犬が生まれてから新しい飼い主に渡すまでに、**飼い主の情報を載せるためのICチップの移植・ワクチン接種・獣医による健康状態検査・ユーロパス**（犬が海外に行くときに必要なパスポート）の発行をしている。犬が欲しいという人に誰かれ構わず譲渡しているわけではなく、新しい飼い主に飼育環境や飼育経験を確認、さらに**譲渡から1年後その犬の様子をチェックしに行く**こともしている。飼い主が犬の世話について相談に来ることもできるので、「世話が思ったより大変だった」という軽率な理由で捨てられる犬は大幅に減るだろうと思った。



真ん中にあるベルン犬にとびかかれる寸前の私

ii. 土佐犬ブリーダー Benta Oudiova さん

今までに1度だけ飼い主から子犬を返されてしまったが、フェイスブックでそのことを投稿すると別の新しい飼い主を見つける事が出来たそう。これの理由は1件1件のブリーダーが小規模なので繁殖できる数に限りがあり、**供給が需要を越えない**ようになっているからでは、と考えた。1度飼われた犬が捨てられてしまった場合、警察が見つ次第**ICチップを使って飼い主に連絡して罰金を命令**する法律があり、まちがっても犬を世話する人がいなくなることはないようだ。勝手に犬を捨てた人に対し法的な制裁が下るシステムの影響力は大きいと思う。

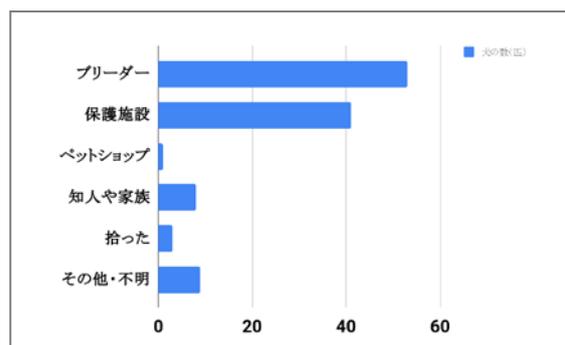


Bentaさんと土佐犬と

iii. アンケート

飼い犬の出身について

右のグラフから読み取れるように、**ブリーダーか保護施設**から犬を連れてくるのが主流である。ペ



ットショップを3軒まわり、店員さんに聞いてみても確かに「ペットショップでは犬や猫の販売は法律で禁止されている」とのことだった。

犬の過剰生産に歯止めをかけるには**生体売買禁止の法律**を制定することがその第1歩になるのではと考えた。

②犬のしつけ・トレーニング

チェコには犬のトレーニング教室が多くあり、実際街中に見る犬たちはリードから離れて自由に動き回っていても、いたずらをしたりどこかに行ってしまうことがない。授業の様子を見学させてもらってトレーナーに話を聞いたり、犬を飼っている人100人にアンケートをすることで見えてきたことをまとめた。



公園で遊んでいた犬たち。リードに繋がれていなくてもいい子にしている姿が印象的

i. トレーニング施設 Haf Bez Obav さん

授業料は1時間当たり日本円で約700円。物価は日本よりやや安い（水の1.5Lペットボトルが約60円）ことを考慮しても**それほど高くはない**という印象を受けた。先生になるために特別な**免許は必要なく、かつその職を本職として生活できる**とのことだった。成犬になってからでもしつけをマスターするのは可能とおっしゃっていたので、子犬の時から訓練を受けた犬でなくてもファシリティドッグになるのに問題はないと推測できる。

注：ファシリティドッグ＝人間のためのリハビリテーションに参加する犬



ある公園で開かれていたトレーニング教室の様子

ii. ドッグトレーナー Pavel Bradac さん

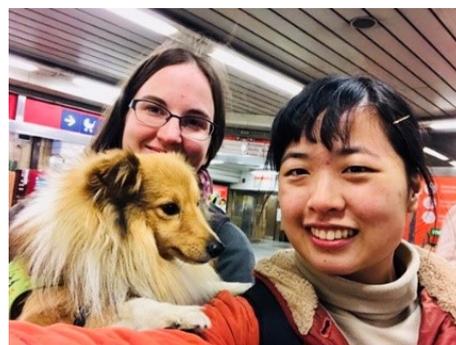
基本的なしつけレッスン以外にも、ウォーターレスキューや俳優犬のためのレッスンも展開している。フランチャイズの店舗も持っており、Pavel さん自身でレッスンの先生を教育している。犬のレッスン業界がこのように発展していくことによって、人がしつけに興味を持ち「言うことを聞かなくて捨てられる犬」が減るのではないかと思った。



Pavel さんと私と、見えづらいですが真ん中に Pavel さんの愛犬がお座りしています

iii. 救助犬トレーナー Tamara Skokankova さん

Tamara さんのいるトレーニング施設は非営利組織であり、ベテランコーチが飼い主にトレーニング方法を教えて飼い主自身がトレーニングをする。救助犬という特殊なジャンルではより高い授業料を払って毎日のようにスパルタ教育をするのかと思っていたが、実際は自分で教えるので授業料は0で、Tamara さんは大学生活と両立して趣味としてやっているそう。犬は好きできちんと育てる気はあるが授業料を払うのは難しいという人に、このスタイルが適用できると考えた。



Tamara さんと Tamara さんの愛犬。
学生寮で1人+1匹暮らしをしているらしい

チェコにも Canistherapy と呼ばれる、犬が高齢者施設などを訪問する活動が存在し、試験に受ければ医療現場にも入ることができる体制が整っている。飼い主に直接ではなく、施設への派遣団体に報酬を与える形式を採っているため、派遣団体が不正に利益を搾取できないよう監視役が設置できればより良いと思った。

iv. アンケート

iv. 1. しつけスクールに通ったことがある集団とない集団間における、しつけレベルの有意差

「公共の場所で静かにしてもらえるか」

1.いつも 2.たまに 3.ほとんどしてられない 4.全く
⇒有意水準 0.05 で t 検定したところ有意確率 0.86 となつて、2 集団間に差は認められないという結果になってしまった。どちらの集団も平均は 1.3 台で、「いつも」に最も近い。「いつも」や「たまに」の定義が曖昧すぎたこと、先生でなくても世間全体でしつけの知識が普及している可能性が原因と考えている。

「人やほかの犬を噛むことがあるか」

1.いつも 2.たまに 3.ほとんどない 4.全くない
⇒Levene 検定で等分散性が認められず、そもそも t 検定



アンケート調査では、自作のスウェットを着て歩き回った

ができなかった。平均値はしつけスクールあり集団が3.8、なし集団が3.9と、わずかながら「しつけスクールに通っていないほうがしつけレベルが高い」ということになってしまった…。ここでも「全くない」に1番近いことから、上と同じ原因が考えられる。

③愛犬国と殺処分0の両立

i. 犬保護施設 Dog point さん

犬の保護・世話には少なからずお金がかかるが、どのようにしてそれを賄うのか聞いたところ

- ・空いた部屋を使って飼い犬の**預かりサービス**
- ・犬のアクセサリ会社を**スポンサー**につける
- ・**犬を飼えなくなった人から**、その犬をもらうときに徴収
- ・捨て犬がいるという通報を受けて捕獲に行くサービス
- ・寄付

などによって収入を得ているとのこと。驚いたのは、社員だけでなくたまに来てくれる**ボランティアにも給与**が与えられるという点だ。日本の動物保護施設では毎日無償で参加してくれるボランティアがいないとまわらない、という話をよく聞くので、このチェコ流・費用の賄い方をヒントに改善していくべきだと思う。



1部屋に1匹保護犬が暮らしている。
一緒に散歩もさせてもらった。

保護された犬の中には癡猛すぎる子や人間を怖がりすぎる子もいるが、施設の社員さん自身がトレーナーのスキルを持っているため、**しつけをして新しい家族を見つけやすく**している。社員さんはこの施設での仕事を本職としており、「大変ではあるが好きなことを仕事にしているから幸せ」という言葉が印象的だった。

ii. 保護犬紹介イベント Dog stars 2018

約10か所の犬保護施設がブースを出し、新しい家族を探している犬の情報を展示したり、グッズの販売をしていた。ここまでは日本でも見たことがあるのだが、このイベントならではだと思ったのは、保護犬がとても良い子だということを示すために**実際に保護犬をイベントに連れてきてショーを行っていた**点である。保護犬を引き取るうえで1番の不安なのは、前につらい経験をしているために問題行動を起こすのではないかだと思う。その不安を払拭するのに効果的だと思った。



イベントの様子。
保護犬たちはレッドカーペットを歩いて、紹介をされていた。

④日常に隔れた、犬と生活しやすい社会環境

i. 公園の多さ

首都・プラハの街を歩いていると、犬が走り回れる広さをもった公園が多いと感じてその数を数えてみたところ、プラハ本駅を中心とする 5km 四方の区域で確認できただけで **25 か所**あった。右の写真のような公園のみをカウントし、犬の散歩が禁止されているところや狭すぎる場所は除外した。**犬を十分に運動させられる場所がある**ことは、犬の育てやすさにつながっているのではと感じた。



とある公園。
芝の緑が美しい。

ii. エチケット袋

チェコには犬を飼うと 1 頭ごとに税金をおさめる必要があり、その代り公園や道路に右下の写真のような**エチケット袋**と**ごみ箱**が設置してあり、フンを処分することができる。計 6 か所の公園にて 10 分間ひたすら地面をみながら歩き続けて、犬のフンの数をカウントするというなんとも滑稽な調査をしたところ、平均して **2.2 個**という結果になった。要は公園がとてもきれいな状態で保たれており、エチケット袋設置が寄与する部分も少なからずあるのではと考えた。



エチケット袋

iii. 犬が入っていい場所・いけない場所

入っていい場所 (ゲージなしで)	入れない場所
電車・バス	幼児用の遊び場
レストラン (一部不可のところあり)	レストラン (一部)
ショッピングモール	スーパー
アパレル店	
公園 (観光スポット付近の公園は不可)	

上の表から分かるように、犬の散歩の延長線上で**ショッピングモール**でお買い物したり、**カフェ**で休憩することができる。少し遠い公園に遊びに行きたいときに自家用車を持っていなくても、

重たいゲージで犬を運ぶ必要なく一緒に電車やバスに乗れる。犬と一緒にこなせる日常生活動作が多いことも、犬の飼いやすさの一因だと思う。



電車やバスに乗っている犬たち。とてもお行儀よくしている。

<文化の違いで苦労したこと・トラブルと対処>

・関西空港の閉鎖

台風により、出発する予定だった関西空港が数日間にわたり閉鎖してしまいました。それにより行きのフライトが欠航になったうえ振替の便も用意してもらえなかったため、**急遽新しいフライトをまた自分で手配**することになった。後期の授業の関係で帰国する日はほとんど延ばせなかったために滞在日数は19日と予定より短くなってしまったが、訪問先に日程を再調整してもらったので、**調査自体に特に影響はなかった。**

・ロシアのトランジットビザ

新しくフライトを手配した際、早く渡航しなければと焦っていたためロシアのモスクワ以外の空港では乗り継ぎだけでも**ビザが必要だということに気付かないまま**、ロシア経由のものを予約してしまっただけでも**ビザが必要だということに気付いたのが成田空港に着いてからだったので**、その日は空港の近くのビジネスホテルに泊まって、次の日に出発した。

・ロストバゲッジ

チェコの空港に到着したときに、**預けていたスーツケースが出てこなかった**。空港の担当スタッフにそのことを伝え、乗ってきた便・スーツケースの特徴・滞在先の住所等を伝えてロストバゲッジ証明書をもらいその日はそのままホテルに行った。保険会社に連絡をしたところ、荷物がなくなったと分かってから6時間たっても荷物がもどらなかつた場合にロストバゲッジと認められ、必要になった生活必需品分のお金が下りるとのことだったので、必要なものを買ってそのレシートを1つ1つ保管した。

・公園にいる物乞い

犬の福祉調査をする上で公園に行くことが多かったのだが、公園はホームレスや物乞いがよくいるため、特に安全に注意する必要がある。基本的にはベンチなどで寝ているだけなので安全であったが、中には話しかけてきてお金や物を要求する人もいたので、そのときは「何も持っていない」とはっきり言うことで対処した。夜は特にそういった人が増えるので、暗くなったら公園には近づかないようにした。

・現地の人の英語レベル

チェコの公用語はチェコ語なので、全ての人が英語を話せるとは限らない。特に年配の方ほど英語が通じない傾向にあるので、訪問先ではご家族に通訳をしてもらったり、アンケートではチェコ語版もあるからぜひ回答してほしいとアピールする必要がある。どうしても言っている意味が分からない場合は Google 翻訳を使った。

・食事

調査をしていると1日に歩く量や英語のコミュニケーションでくたくたになってホテルに帰ることが多く、また、調査に時間を割こうと思うと自分で共用キッチンを使って調理する時間が取りにくかった。スーパーで売っているお惣菜などは自分にとって慣れない味で余計に疲労がたまってしまうし、レストランでごはんを食べるのは費用がかさんでしまうので、専らマクドナルドなどのファストフード店で食事をしていた

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

<新しい何かを見つけることが最低ライン>

3週間弱も1人で海外に滞在して何かを調査するという経験は今までになかったため、うまくいかないことによる精神的な苦しさをあまり想定しておらず、渡航中にうつのような状態になることがあった。しかし、張りつめすぎないほうが何事もうまくいく上、なによりおもしろチャレンジそのものを楽しめると強く感じた。なので「30万円も給付してもらったからには、絶対成果をださなければならない」と自分を追いつめそうになったときは、壮行会で総長がおっしゃっていた「何かあたらしいことを見つけてきたらそれでいい」という言葉を思い出した。難易度が高すぎない目標ラインを設定することで、適度にリラックスして調査ができると思う。

<自己管理>

既に述べたように、私は渡航する際にいくつかのトラブルに遭ってしまった。「まだ現地で調査をスタートすらしていないのに…。とにかく早く何かに手をつけねば。」と焦って、ご飯をたべたり休憩をとったりといった基本的な体調管理が頭から抜けそうになった。疲れすぎている状態で調査は満足にできないことは当たり前だと分かっていたにも拘わらず、である。トラブルに遭うと正しい判断がしにくくなるということを痛感した。なのでそのような際には、一旦調査のことを頭から切り離して自分の健康だけを考えるくらいがちょうどいいと学んだ。

<自分が不審者と見られる可能性を念頭に>

調査の1つとして街頭アンケートをした。相手からすれば、いきなり外国人が英語で話しかけてくるのだから多少身構えてしまう。スリや変な勧誘の手口と思われるではアンケートに答えてくれないので、相手に信頼してもらおうよう工夫することが必要だと思う。簡単なあいさつはチェコ語を使い、アンケート用紙には英語だけではなくチェコ語版も載せる、自分の身分とアンケートの目的を簡単な英語で分かりやすく説明する、笑顔ではきはきと話す、などの1つ1つが調査をやりやすくするコツだと思った。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

<理学療法とファシリティドッグの橋渡しに>

既に述べた通り、私は将来理学療法士として動物介在療法をしたい気持ちがあってこの調査を計画した。医療現場に参加する犬はあくまで患者ではなく医療従事者の側なので、その分トレーニングや感染症予防対策を施されなければならない。すべての医療従事者が動物介在療法に理解があるわけではなく、むしろ「犬を病院に入れて大丈夫？」と懸念する人が多いのが現状なので、まずはそのような人たちにリスク管理がきちんとできていると示す必要がある。

そこで私は、一般の方が飼い犬とともに救助犬のトレーニングをしている様子を見学したり、しつけ教室の先生に話を聞いたりしたことで得た情報を生かして、**犬が人の病院に入ることを認められて活躍するための基盤**を作りたいと思っている。



高齢者施設でボランティアをする犬。
それを示す制服を着ている。

<犬を道具にしない対策>

動物介在療法に関わる人間はファシリティドッグの命や健康を守る責任がある。なので、ファシリティドッグを提供するビジネスを絶対に生まれさせてはならないし、犬を過度のストレス環境においてまで動物介在療法を行ってはいけないと思っている。

そこで、今回ブリーダーの調査で学んだ

- ・ブリーダーたちが小規模で、かつ利益重視ではなく趣味のような感覚で犬を繁殖・提供しているからこそ過剰な犬の生産が防げる
- ・新しい飼い主に渡した後もブリーダーはその飼い主と連絡を取り続けて犬の生活状況を把握しているから犬の健康が保証されている

の2点をファシリティドッグの育成に役立てたい。ファシリティドッグの提供元はもともと**家庭で飼われている犬か、小規模で犬のケアが行き届いたブリーダーに限定するルールを設定し、犬の健康状態を把握できるようICチップによる情報共有システムを充実させていこうと考えている。**

■ 主な奨学金の使途

*渡航費

*生活費（食費、交通費）

*宿泊費

*海外旅行保険・調査費 など